

< 鶴ヶ島市 >

## 本紙既報の飲酒暴力事件

(鶴ヶ島市議会 内野嘉広市議による)

### — 総括 —

本紙への投書によって発覚した「事件」は、平成 29 年 2 月 9 日午後 10 時頃に起きた。鶴ヶ島市議会・内野嘉広市議と出雲敏太郎市議は、大曾根英明氏（元市議）宅において酒を呑み泥酔の上、口論となり、内野市議が出雲市議を殴るといふ暴力に及んだ。出雲市議は全治 2 週間もの怪我を負った。「現役市議による暴力事件」以外の何ものでもない。それは被害に遭った出雲市議が直後に警察へ被害届を出したことから明らかだ。

ところが、今回、本紙が事件当事者である加害者・内野市議、被害者・出雲市議に直撃取材を行ったところ、当事者の両市議が事件発生の日時を覚えていないのだ。地元住民を騒がせ、市民を憤怒させた当市議らの自責の念の希薄さが見て取れるといえよう。本紙による両市議と周辺取材から明確に浮かび上がってきたものは、暴力を振るった内野嘉広鶴ヶ島市議の傲岸不遜な態度であり、反社会的な彼の思考回路、精神構造だった。

### 「暴力性」それ自体が重大な問題であることを認めない 内野嘉広市議

本紙既報の当該事件は、その後、内野市議の謝罪訪問を受け入れた出雲市議によって示談となり被害届が撤回されたことで幕を下ろした。

後述するが両市議は、鶴ヶ島市議会に籍を置いていた会派・新政クラブを事件後に離れて新たな会派・つるがしま未来を結成した。この経緯をもって特に事件加害者たる内野市議は、あたかも兄弟関係のような仲の良い市議同士がたまたま酒の勢いでヒートアップした程度の話であったかにしたいようである。

事件について内野・出雲両市議の元会派先輩市議たちから「反省の色が見えない」と指摘されている点について本紙が尋ねると、内野市議は次のように答えた。

「反省の色と言うが…そこのところを私は、どう捉えていいのか判らない。会派・新政クラブから私と出雲君が抜けた訳だが、やはり議員という姿勢の点においては会派にずっと居ることについて、どうなのだろうということは以前からあった。これは今回の件とは別に聞いて頂きたい。以前から会派を出るという話があった。我々からすると、きちんと勉強して市に対してきちんと意見を言える姿勢を貫いて行こうということで出雲君と常々、執行部と馴れ合いになるんじゃないと…討論等も自分たちでしっかり作って、自分達でやらなければダメだという姿勢で臨もうと常々言っていた。その後も反省がないと言われたが、私は個人的にこのような事を起こした以上は“暫くの間、酒は断つ”と当然の事はやっていた。」

実は事件後、両市議は、先輩議員の藤原市議から「軽率だ。手を出すとは、何事だ！」と厳重注意を受けており、金泉市議・齊藤議長（当時）にも叱責されているのだが、そのことを内野市議は取材では語らない。

内野市議は、酔えば人を殴るという自らの「暴力性」自体が問題の本質であることをまったく理解できていないとあってよい。「反省が足りないと言われる意味が解らない」との内野市議のコメントがその証左だ。

この事件の問題は「普段は仲が良い相手を酔った勢いで殴ってしまった」などという青春ドラマの一場面にすり替えられるものではない。「意見が対立した人間を殴る」という、内野市議の「暴力性」それ自体が厳しく追及されるべき重大な問題なのである。

ちなみに法律上は、加害者が暴行によって人に傷害を与えた場合には「傷害罪」となる。本件は被害者・出雲市議が被害届を取り下げたものの、仮に立件されていたなられっきとした「傷害罪」となるものだ。

公務の場であろうがなかろうが、日頃仲良しだろうが陰悪だろうが、背景事情に関係なく、いわゆる「カッとなったら自制できない」という内野市議の性格・言動そのものが有権者・市民社会への裏切りなのだ。

市町村議員は有権者の投票によって選ばれる「選良」でなければならない。仮にこの事件が一般企業の中で起きたなら、特に加害者側は降格や減俸は当然の処分、厳しい企業であれば解雇もあり得るだろう。

ましてや市議という市民の血税を報酬で得ている公職者、また民主主義社会における市民代表たる市議でありながら、自分の意見の正当性を強弁する手段として暴力を行使するということが、どれだけ異様で凶悪な反社会的な行為であったのかを、内野市議はまったく自覚できないのである。

内野市議は「暫くの間、酒は断つ」と述べたが、語るに落ちるとはこのことだ。「暫く」ではなく、これを重く受け止めているならば「生涯の断酒を誓う」くらいの宣言があっても当たり前である。

## TOKIO・元メンバーよりも倫理観と社会性に欠ける内野市議

つい先日まで連日マスコミで報じられた、人気アイドルグループ・TOKIO（トキオ）の元メンバーによる強制わいせつ事件については、芸能界に興味がない読者でも記憶していることだろう。

彼らアイドルグループは単なる芸能人として以上に、東日本大震災最大の被災地・福島県復興を呼びかける代表的な存在としてボランティア活動を続け、次期東京オリンピックの公式アンバサダーを任命されるなど、現在の日本社会を代表する、いわば公的な立場であった。だからこそ、飲酒の上の未成年者への強制わいせつ事件という衝撃は、まさに一般社会ニュースのトップ記事として扱われたのである。そして、事件加害者の元メンバーは、被害者と和解済みであったものの、自らグループを辞め所属事務所を辞職した。

被害者への罪の意識、一芸能人を超えた国民的存在の大きさからも、彼が社会に与えた被害は甚大だった。事件の重さを知れば当然の選択だが、しかし、語弊を恐れずにいえば、彼はせめて「自力で成功を掴んだ芸能人」であって、有権者の期待と信頼に推されて選挙で手にした議員バッジをつけた公人ではない。所属事務所の手腕が前提であれ、報酬も自らの才能で掴み取っていたもので、議員になれば制度的に支払われる歳費で生活していた立場でもない。その芸能人でさえ、傷つけた被害者への贖罪と社会からの信用を毀損した責任を、自らの芸能界引退というかたちで果たしている。

これに比べて内野嘉広鶴ヶ島市議の、自ら引き起こした暴力事件に対する認識の低さ、無責任さ、いや開き直りとさえいえる傲岸不遜な姿勢には、もはや市議の資格など皆無ではないか。

## 加害者・内野市議と、被害者・出雲敏太郎市議との温度差

内野市議は、殴ってしまったことは重く受け止めなければならないが、普段は仲が良い出雲市議との兄弟喧嘩のようなものと言いたげである。出雲市議は被害届を取り下げたのだし、その後に共に新会派を立ち上げているのだから、というわけだろう。

ところが、今回、本紙の取材に応じた出雲市議からは、内野市議との関係性の認識に温度差が見て取れた。出雲市議は次のように語る。

「内野市議に顔を殴られ、目が赤黒く大きく腫れ上がり、全治2週間の怪我を負わされた。酔った勢いで通報したのではなく、このような犯罪行為であれば、今後、誰であろうと、どういった状況であろうと同じ対応を取っていく。例え懇意にしている間柄であっても、守るべきことは守らなければならないと今でも考えている。当時、警察に通報した行動は、今でも間違ったことではないと考えている。」

「鶴ヶ島市議会関係者によれば、両市議は仲の良い二人、兄弟分のようなと言われているようだが？」と出雲市議に水を向けると、同市議は微妙な表情を見せた。「仲が良いですかね…話す機会は多かったと思う。仲の良い仲間だとは思っている。しかし、それ以上の関係ではないと思っている」

内野市議とは以前から政治の話などで意見交換を行っていたが、当該事件のように暴力を振るわれたことは今まで一度もなかったと出雲市議はいう。そうであるなら、なおのこと内野市議の本件暴力事件は異常であったことになる。出雲市議が続ける。

「議員の中には先輩・後輩の序列は当然あるが、議員は市民一人一人の信託を受けているので、議員一人一人は対等であると考えている。暴力を振うことは犯罪行為であると断定し、法治国家において議員として法を順守することは当然である。今回の事件だけが会派を離脱した理由ではないが、会派を離脱する大きな要因とはなった。」

内野市議との関係性について、出雲市議は「政治的に意見が合うので2人肩を並べてはいるが、仲の良い仲間だと思うが、それ以上の関係ではない。」と、他の議員が見る兄弟分のような関係をきっぱり否定している。

## 先輩市議の指導も馬耳東風

本紙が本件を知ったのは匿名の投書によるが、1年3ヶ月前の事件発生当時、鶴ヶ島市政関係者の間には怒りと苦汁の事後処理が交錯したという。

自制を失い市議失格の暴力に及んだ内野市議を抱える会派・新政クラブの当時会長であった藤原建志市議、当時は鶴ヶ島市議会の議長であった齊藤芳久現鶴ヶ島市長、金泉婦貴子現鶴ヶ島市議会議長は、事後対応に頭を悩ませた。

元市議・大曾根英明氏宅で演じられた内野・出雲両市議の醜態に唾然とし、更にこの一件を所属する会派責任者に報告もせず、反省の色も見せない内野市



議の無作法かつ無責任な態度を前にしてさえ、彼ら先輩市議は鶴ヶ島市議会の名誉と信頼を守るべく、事件を早計に表面化させることなく、必死に両市議の行為を諭し、厳しい訓戒を与えた。

しかし、内野市議と彼に従う出雲市議は、自らの所属会派の先輩市議たちによる善導さえ馬耳東風のように、反省の色なしを露に見せる姿勢であったと、当時の事情を知る関係者はいう。

そして藤原・齊藤・金泉市議は、ただでさえ常日頃、口に出す会派に対する考え方の違いを主張する内野・出雲市議兩名の、当該事件後の市議としての自覚と常識を欠いた対応にサジを投げざるを得ず、結果として会派から出すに至った。その後、内野・出雲両市議は勇んで新たな会派・つるがしま未来を名乗り、やがて市議に返り咲いた大曾根市議や会派・大空と合体するのである。

藤原・金泉両市議、現齊藤市長は「市議による暴力事件」を揉み消すという考えではなかった。政治家としてはまだ年若い内野・出雲両市議が、これを機に深く反省し、市議として市民の為に誠実に働いてくれることを願って、会派市議として必死に説諭したのである。

ただひとつ苦言を呈するならば、彼ら先輩市議の当時の対応も市議会議員としてのコンプライアンスに照らせば、甘かったと言わざるを得ない。内野・出雲両市議を真に善導しようとするならば、逆に市議会で彼らの信を問うくらいの厳しさも必要だったのではないか。結果、若手市議を見守ろうという会派先輩たちの親心につけこむような小狡さで、内野嘉広市議には「改悛の情」が少しも見られないまま、いまに至っている。

投書により事件を知った本紙取材に対して内野市議は「不徳の致すころ」などと形式的なコメントに終始した。内野市議は、会派の先輩諸氏によって助けられたことさえ理解していない。酒に酔って同僚市議を殴り、危うく警察沙汰となるどころだった内野市議の反社会的な行動は、先輩市議らの若い市議の将来を慮った温情によって、なんとか不時着できたに過ぎないのだ。

市議でなくとも、社会に責任を問われる立場の者であれば、市民社会に対して自ら公式に謝罪することは最低限のモラルだ。

前述の元芸能人は、被害者と仕事上の関係者以外の国民に直接的な被害を与えたわけではない。しかし、社会における自分の立場と責任を少なくとも自覚するに至って、マスコミを通じて公式に謝罪を表明し芸能界を去った。

余談ではあるが、かの人気グループは加害者である元メンバーが脱退したところで、多くの苦難を強いられ続けることになるかと芸能界関係者は言う。酒が

原因での事件であるから、加害者が抜けたにせよ同グループには酒造メーカーの商業は依頼されなくなるし、ファンにも社会にも拭い切れないネガティブなイメージという禍根を残すからだ。加害当事者の元メンバーは、それを真に重たく受け止めたからこそ、子供の頃から自分が築き上げたキャリアのすべてを罪の代償として捨てたのである。

一方、内野嘉広氏は鶴ヶ島市議会議員という法的な公人である。たとえ被害者との示談が成立しようとも、なし崩しに責任を放置することなどは許されない。くり返すが、内野市議の場合は「**被害者・出雲市議が示談に応じたのだから、問題ないではないか**」というレベルの話ではない。彼は自分の意に反することに対して「**暴力**」を振るう人間であったという事実が、公人として重大な問題なのである。

人によっては（あるいは内野市議自身も）「**一回だけの過ちじゃないか**」と言うかもしれない。しかし、その言い分は政治家には通用しない。なぜなら、彼らは一回の選挙、有権者の一票によって議員になるからだ。

そもそも政治家とは、当選して政治家となっただけからしか真の評価ができない種類の仕事だ。だからこそ有権者の信頼を裏切る行為、しかも暴力事件などは「**たった一回**」であっても、一回の選挙の重み、つまりは議会制民主主義の根幹を否定する、市議としては即時辞任すべき重大な過失なのである。

ところが内野市議は、自分の支援者に事件についての形式的な報告をただけで、他方の市民代表でもある所属会派先輩市議に事件の報告もしなければ、謝罪もしないまま事件を風化させ、本紙取材にも「**不徳の致すところ**」とコメントするに留まる。国語的に指摘すれば「**不徳の致すところ**」という言葉は、単に「**自分のせいで起きたこと**」という事情の説明に過ぎず、謝罪の言葉ではない。こうした内野市議の一言一句にも、彼の無反省、市議としての無自覚、市民社会への無責任さが露呈している。

## 鶴ヶ島市に甘ったれた「ボクちゃん市議」は要らない！

前述のように内野市議は、先輩市議に反省を問われる段に至ると、話を巧みにすり替え己の政治論を述べ始めている。

彼は、多くの市民から信任されている先輩議員から反省を問われることが、彼の後援者より何倍もの多くの市民から反省を求められていることと同じであるという、市議の責任の重さを根本的に理解してない。いや、理解する気さえ

ないのかもしれない。いわば自身が起こした暴力事件をも党派離脱の奇貨として、あたかも党派長老議員の小言から逃れ、若手議員が市政の未来を拓くかの自尊心だけは旺盛に新党派を名乗っているのだから。

有権者は、基本的に自身が推した政治家を信じたい。自分が票を投じた人物が、政治家として間違っていたとは思いたくない上に、背景には地域的な利害も関係するからだ。しかし、議員とは全体の奉仕者である。本紙が追及する内野市議の暴力事件は、彼自身の暴力性を露呈させたという点だけでも、鶴ヶ島市議会・鶴ヶ島市民の民度が問われる重大なものであるということを、内野市議の支援者こそが厳しく認識すべきなのだ。

「たった一回、仲良い同僚を殴っただけだ」などという釈明が、健全な市民社会で通用すると考えることは明らかに間違っている。それが許されるならば、すべての暴言・過失・犯罪事案が「一回だけなら無罪放免」になってしまう。内野市議がいかなる自信と了見で居直り同然の態度でいられるのか、常識ある人間には理解が及ばないが、少なくとも本紙に投書を寄せた鶴ヶ島市民は、彼のような甘ったれた「ボクちゃん市議」は不要だと訴えているのだ。

付言すれば、いまは内野市議と党派を共にする大曾根市議も、いかに私邸の中とはいえ大酒を看過したという意味では事件の遠因でもある。

「大曾根市議」「市議たる品位を足蹴にした内野市議」「警察を利した上で直ぐに被害を取り下げるという主体性に欠ける出雲市議」このような市議たちが結成した党派が、これから鶴ヶ島市民の信任を得られ続けるのか、本紙には甚だ疑問である。